

Title	山形市方言の文末詞シタ : ベシタ・ガシタの意味にもとづいて
Author(s)	渋谷, 勝己; 澤村, 美幸; 大久保, 拓磨 他
Citation	阪大日本語研究. 2006, 18, p. 1-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3569
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

山形市方言の文末詞シタ —ベシタ・ガシタの意味にもとづいて—

On the meaning of the sentence final particle *-shita* in Yamagata-shi dialect:
Based on the meaning of *-beshita* and *-gashita*

渋谷勝己・澤村美幸・大久保拓磨・松丸真大
SHIBUYA Katsumi, SAWAMURA Miyuki, OKUBO Takuma, and MATSUMARU Michio

キーワード：山形市方言、確認要求、納得、シタ、話し手の確信

【要旨】

本稿では、山形市方言において、確認要求の「べ」および納得のガにのみ下接して用いられる文末詞シタの担う意味を、「べ」(3節)とガ(4節)が単独で使用された場合と対比することによって明らかにすることを試みる。分析の結果、シタは、「べ」やガなどの形式が表す、知識や認識の確認(確認要求)や受容(納得)といった広範な意味のなかから、とくに「話し手に発話時以前に既存の知識や認識、想定がある」場合を取り出して、その書き換えを聞き手(確認要求)や話し手(納得)に求めることを積極的にマークする形式だということが明らかになる。

1. はじめに

山形市方言の、平叙文で用いられる文末詞のひとつにシタがある^{1) 2)}。

(1) あそこにポストが見えるベシタ (見えるだろう?)

(2) あー、そんなこともあるガシタ (あるか)

このシタは、他の文末詞とは違って、

(3) きのう、おまえに言ったベシタ (言っただろう?)

(4) あー、そんなこともあるガシタ (あるかー)

のように確認要求の「べ」(渋谷 2001)と納得のガ(共通語の「か」相当。当該方言では、ラ行五段動詞ル形に後接した場合(アッカシタ、スッカシタなど)など一部の環境を除いて有声のガで現れる)と共起するのみで(シタが下接した場合も確認要求と納得を表す)、そのほかのかたちで用いられることはない。またシタだけが単独で用いられることもない(以下、用例は、焦点となる方言形式を中心に方言形式をカタカナで示し、他は漢字ひら

がなまじりで記す。本文中で各方言形式に言及する場合には、「べ」についてのみ、読みやすさを考慮してカギカッコに入れて示す。イントネーションは、上昇調を「↑」で記し、下降調については、とくに下降調であることを示す場合にのみ「↓」を用いるほかは注記しない。＊は文法的に不適格であることを表す。以下同様）。

(5) ＊太郎はそこに行くシタ

本稿では、これらの形式を、ベシタ、ガシタのようにそれぞれひとつの形式と捉えて、当該方言の確認要求の「べ」、納得のガと対比しながらその意味・用法を記述することを試みる。

分析のデータは、筆者ら（澤村・大久保・渋谷）の内省を中心とし、その他、3.5 節のベシタとドレについては、2名の女性インフォーマント（1936年生、1954年生、いずれも山形市出身）の内省を得た。筆者らの居住歴は以下の通りである。澤村：1980年生。0～18歳山形市、19歳～仙台市居住。大久保：1982年生。0～5歳・12～18歳山形市、その間山形県米沢市、19歳～仙台市居住。渋谷：1959年生、～18歳山形市、～24歳東京、その後現在まで大阪。松丸：1973年生。～15歳京都市、～24歳東京、その後現在まで大阪。ベシタ・ガシタの適格性判断については、一部を除き、内省者間で大きな違いはなかったが、相違がある場合にはその旨を記した。

なお、本稿で採用した例文については、煩雑になることを恐れて本文ではいちいち断っていないが、田野村（1988）、三宅（1994）、蓮沼（1995）、安達（1999）のあげる例に方言訳を与えたものが多い。

以下、文末詞ベシタ・ガシタについて、文タイプとの共起制限と文内分布についてまとめたあと（2節）、ベシタの意味・機能（3節³⁾）、ガシタの意味・機能（4節）の順に考察を進めることにする。

2. ベシタ・ガシタの分布

ベシタ、ガシタは、基本的に「べ」やガの分布を引き継いで、ともに平叙文の文末のみで用いられる。疑問文や命令文、勧誘文などでは用いられない。

(6) ＊あの山が蔵王だガ {ベシタ/ガシタ} (疑問文)

(7) ＊誰が行った {ベシタ/ガシタ} (WH 疑問文)

(8) ＊早く帰れ {ベシタ/ガシタ} (命令文)

(9) ＊いっしょに行くべ {ベシタ/ガシタ} (勧誘文)

また両者は、従属節のなかで用いられることもない。

(10) *そこへ行った {ベシタ／ガシタ} 人

(11) 太郎はそこへ行った {*ベシタ／*ガシタ} から、もう食事を始めよう

なお、両形式には、ベシタの場合に、もともと独立度の高い（「行グベネ、ネ（＝行こうね、ね）」のように単独でも使用できる）ネが下接することがある程度で、

(12) 太郎はまだ学生だベシタネ

ほかの文末詞が下接することはない。

以下、ベシタ（3節）・ガシタ（4節）の意味・用法について考察する。

3. ベシタ

本節ではまず、ベシタの意味・用法について、同じく確認要求を表す「べ」（3.1～3.4）やドレ（3.5）の意味・用法と比較しつつ考察する。

3.1. 「べ」とベシタの共通点

「べ」（標準語の「だろう」に相当）とベシタは、いずれも確認要求を表す形式である。以下、この2つの形式の意味・用法について、共通語の確認要求形式「(の)ではないか」を分析した田野村（1988）や三宅（1994）の枠にそってまとめてみよう。

「べ」やベシタは、両者ともに、「命題によって表されている知識や情報を、聞き手が有していることの確認を求め」る「知識確認の要求」を表している（三宅 1994：21、共通語では「じゃない(か)」と「だろう」に互換性のある部分）。「知識確認の要求」は、さらに、「潜在的共有知識の活性化」と「認識の同一化要求」の2つの用法にわかれるが、「べ」とベシタはそのいずれの用法も担う（三宅の分類ではいずれもデハナイカI類）。

(べ-1・ベシタ-1) 潜在的共有知識の活性化：聞き手は忘れていないかもしれない、「話し手と聞き手がすでに共有してもっているはずだ」と話し手が想定している聞き手の知識を活性化しようとして、話し手が聞き手に働きかける用法。「ほら」と共起し、共通語の「だろう」「じゃないか」で置き換えられる。

(13) 枝豆って、ふつう緑色だ {べ↑／ベシタ}（＝緑色だろう／じゃない）

(14) 芋煮会をするときはふつう酒をもっていく {べ↑／ベシタ}

(15) 去年の今ごろ、おまえといっしょに映画に行ったケ {べ↑／ベシタ}（ケは回想）

(16) ほら、むかし、デパートの前に郵便局があるケ {べ↑／ベシタ}（ケは過去）

(17) 来年、山形で映画祭が開催される {べ↑／ベシタ}

(べ-2・ベシタ-2) 認識の同一化要求：聞き手に、話し手がもっている認識と同じ認識

をもつように要求する用法。発話時以前には、聞き手はその知識や認識をもっていないともよい。共通語の「だろう」「じゃないか」で置き換えられる。

(18) 君はもう大学生なんだから、受験の心配なんてない {ベ↑/ベシタ} (=ない
だろう/じゃない)

(19) そんなこと言ったら、みんなに誤解を与えるだけだ {ベ↑/ベシタ}

(20) そんなにきつく言わなくてもいい {ベ↑/ベシタ}

(21) この忙しいのに、遊びに行ってる暇なんかない {ベ↑/ベシタ}

イントネーションについては「ベ」は上昇調、ベシタは下降調が一般的であるが、聞き手が一回で思い出せないとき（潜在的共有知識の活性化）や認識しないとき（認識の同一化要求）、あるいは話し手が「聞き手が活性化・認識していて当然」と思う事態などについては、「ベ」が下降調をとることがある。

(22) そんなこと、太郎に言ってもしょうがない {ベ↓/ベシタ}

またベシタについても、話し手が女性の場合で、聞き手がなかなか納得しないようなときに、わずかに上昇するような音調で発音されることがある（「 \uparrow 」で記す。以下、用例が会話例の場合には、話し手を「A」「B」のように示す）。

(23) A1: むかし、あその角に駄菓子屋があっけ {ベ↑/ベシタ}

B: そうだったかなー

A2: あっけ {ベー↓/ベシター {↓/ \uparrow }}

「ベ」とベシタの意味の違いについては、3.4節で考える。

3.2. 「ベ」に特徴的な意味

一方「ベ」は、ベシタがもたない、

(ベ-3) 推量

(24) 太郎はたぶんそのうち来る {ベナ/*ベシタ} (=来るだろう。ナは文末詞)

(ベ-4) 勧誘

(25) いい機会だからきみもいっしょに行く {ベ/*ベシタ} (=行こう)

(ベ-5) 意志⁴⁾

(26) そんならおれが行く {ベナ/*ベシタ} (=行こう)

といった意味のほか、広く確認要求にかかわる用法としても、ベシタがもたない、次のような意味をあわせてもっている（三宅 1994 の分類ではいずれもデハナイカⅡ類）。

(ベ-6) 命題確認の要求：話し手にとって真偽が不確実な命題が真であることの確認を聞き手に要求する用法（三宅 1994：19）。「だろう」「じゃないか（動詞の場合「の

じゃないか)」に置き換え可。

(27) おまえ、そこに行きたいんだ {ベ/*ベシタ}、本当は

(28) 前から思ってたんだけど、君、本当は彼女が好きなんだ {ベ/*ベシタ}

(29) (出身が山形と聞いて) 山形だったら、雪がたくさん降る {ベ/*ベシタ}

(ベ-7) 強い見込みをもった確認の要求：話し手がほぼ真であると思っている事態について、聞き手に確認する用法 (三宅 1994:19-20)。「だろう」には置き換えられるが、「じゃないか」には置き換えられない。

(30) (行きつけのラーメン屋に案内して) ここのラーメン、なかなかうまい {ベ/*ベシタ} ⁵⁾

(31) (入試が終わったあと) どうだった? おれが言ったとおりの問題が出たケ {ベ/*ベシタ} (ケは報告、渋谷 1999)

(32) おまえも当然行く {ベ/*ベシタ}

(33) (子どもがその場ではじめて逆上がりができるようになって、得意になって親に自慢して) ほら、ぼく逆上がりができる {ベ/*ベシタ}

(ベ-4) 勧誘や (ベ-5) 意志など行為の遂行に関わる用法は別にして、(ベ-3) 推量、(ベ-6) 命題確認の要求、(ベ-7) 強い見込みをもった確認の要求などの、認識のありかたをめぐる用法に共通しているのは、程度の違いはあれ、いずれも、「話し手の発話時 (以前) の認識には、不確定な要素が含まれている」ということである。

なお、イントネーションについては、「ベ」の場合、(ベ-3) 推量、(ベ-5) 意志、(ベ-4) 勧誘の「ベ」では、前接形式に平らにつくか「ベ」で下がる。また、(ベ-6) 命題確認の要求と (ベ-7) 強い見込みをもった確認の要求では、上昇・下降いずれのイントネーションもとる。

3.3. ベシタに特徴的な意味

一方、ベシタには、「ベ」にない、次のような用法がある。

(ベシタ-3) 聞き手の知識の仮想：聞き手に知識はない、また聞き手に確認を要求しても確認するすべはないと知っていながら、あたかも聞き手がその知識を確認できるように想定して聞き手に新規情報を伝達する用法 (3.5 で述べるドレも使用不可)。

(34) (研究室での会話を知らない母親に向かって) この前、研究室のみんなが学会に行け行けって言うから行ってみた{*ベ↑/ベシタ/じゃない↑}。そしたら、高校の同級生だった花子も来ててねー…

(35) (聞き手は知らないという状況で) 私、小さいころ山形に住んでいた {*ケベ↑

／ヶベシタ／じゃない↑}。だからスキーは少しできるんだけど…

いずれも、発話時以前の聞き手の（潜在的な）知識を前提としない。

また、同じく発話時以前の聞き手の（潜在的な）知識を前提としないものでありながら（ベシタ-3）聞き手の知識の仮想とは異なって、共通語の「じゃない」に置き換えられない例もある。話し手について、その行為の妥当性を主張するような意味がある。

（ベシタ-4）話し手の行為の妥当性の主張：聞き手に知識はない、また聞き手に確認を要求しても確認するすべはないと知りつつ、聞き手に、話し手がとる／とった行為の妥当性を主張し、その理解を求める用法。

(36) A：結局会議には誰が行くの？

B：誰も行くって言わないから、私が行く {*ベ／ベシター／*じゃない↑}

(37) A：あの捨て猫、どうした？

B：誰ももっていかないから、私が拾って飼ってる {*ベ／ベシター／*じゃない}

(38) A：この紙、今日までに持っていかなければいけないっていったヶ {ベ↑／ベシタ}。

どうして書いておいてくれなかったんだよ

B：そんなこと、知らなかった {*ベ／ベシタ／*じゃない}

(39) A：（電話で）ごめん、待ち合わせ、30分くらい遅れそうなんだけど

B：それなら立ち読みでもして待ってる {*ベ／ベシタ／*じゃない}

（意志の「べ」の解釈では（ベナの形が一般だが）適格）

(36)～(38)には、聞き手を非難するような意味合いがある。

なお、これらの文に、「実は」のような、聞き手に知識がないと想定して、事態を告白するときなどに用いられる形式が共起すると、ベシタは不適格になる。

(40) A：結局会議には誰が行くの？

B：実は私が行く {*ベ／*ベシター／*じゃない↑} ⁶⁾

3.4. 知識確認要求の「べ」とベシタの相違点

以上の分析をふまえて、本項では、知識確認要求の「べ」とベシタの違いについてまとめてみよう。3.1～3.3の分析から、まず、知識確認要求を表す「べ」とベシタの違いにかかわりそうな事象を整理すると、次のようになる。

(a) 「べ」は上昇調、ベシタは下降調をとるのがふつうである。(3.1)

(b) ベシタには、（ベシタ-3）「聞き手の知識の仮想」、（ベシタ-4）「話し手の行為の妥当性の主張」といった、聞き手に情報を伝達するタイプの用法がある。(3.3)。さらに、「べ」とベシタには、丁寧さをめぐって、次のような違いもある。

(c) 「べ」は聞き手が目上の人の場合にもある程度使用できるが、ベシタは使用しにくい（#は語用論的に不適切であることを表す。以下同様）。

(41) 先生、学校の門のところ、大きな木がある {べ↑ / #ベシタ}

(d) 「べ」の文には丁寧のすが下接するが、ベシタには下接しにくい⁷⁾。

(42) (見知らぬ年輩の人に道を聞かれて) あそこにポストある {ベッス↑ / *ベシタッス}

以上のことから、「べ」とベシタの違いについては次のようにまとめることができよう。

(43) べ : 知識確認の要求を表す無標形式である。話し手の知識や認識をそのまま聞き手にもちかけて、聞き手の確認を得ようとする場合に用いられる。話し手の知識や認識がどの程度確定しているかということは関与しない。どのような場合でも使用できる。

ベシタ : 話し手の知識や認識は確定しており、その確定した知識や認識にもとづいて、聞き手にその確認を要求する。したがって、確認要求にたいする聞き手の返答が話し手の確認しようとした命題内容を肯定するものではない場合でも、話し手の知識や認識は容易に変更することはない（この点、経験的な根拠をもって確認要求を行うドレ（渋谷 2001）に近い。ベシタとドレの違いについては 3.5 で述べる）。

このような両者の違いは、次のような談話の展開のなかでも確認することができる。

(44) A1 : 去年のいまごろ、みんなで松島に行ったケ {べ↑ / ベシタ}

B : そうだったかな？

A2 : 行ったケ {べー { *↑ / ↓ } / ベシター} もう忘れたの？

の例では、A1 は実際には話し手の確定した知識にもとづいて確認を要求しているが、「べ」を用いると、聞き手に柔らかく確認を求めることになる。また、その返答が、B のように、それに確認を与えるものではないような場合でも、話し手の確定した知識は B の返答によって動揺することはないので、A2 ではベシタを使用して、再度確認要求を行っている。それにたいして、

(45) A1 : 岩手に八戸っていうところある {べ↑ / ベシタ}

B : えっ、八戸って青森だ {べ {↑ / ↓} / ベシタ}

A2 : えっ、本当？ そうだった？ いや、岩手だ {べー ↓ / ??ベシター}

の例では、A1 は岩手に八戸があることを確信して確認を要求しているが、B の返答は A の確信を揺るがすものであった。そのような、知識に不安を覚えてすなおに確認を求めたときに使われたのが、A2 の「べ」という形式である。次のような例も同様に、ベシタを

用いたほうが、その行動の妥当性を主張する度合いが高い（?は適切度が若干低いことを表す）。

(46) A：彼女、怒ってるのかなあ

B：当たり前だ {べ↓/ベシタ}、おまえがあんなこと言ったんだから

(47) A：おまえ、なんで帰るの？

B：おまえが帰れっていうから、帰るんだ {べー↓/ベシタ}

なお、ベシタと類似する意味は、「べ」に「命題内容を聞き手に押しつける」ズ（渋谷2000）やヨを付加したかたちでも表現できる。

(48) A1：郵便局の向かいに映画館があるべ↑

B：そうだったっけ？

A2：ある {ベシター/ベズー/ベヨー}

しかし、ズやヨは、納得しない聞き手を再度説得するような場合に用いるのが基本で、

(49) (道を説明しながら) あそこにたばこ屋さんがある {ベシタ/#ベズ/#ベヨ}

(50) あの人、今度大阪に行く {ベシタ/#ベズ/#ベヨ}

といった場合には使用できない。

3.5. 補説：ベシタとドレの相違点

山形市方言には、「べ」・ベシタのほかに、ドレという確認要求のための形式がある（渋谷2001）。このドレとベシタの異同については渋谷（2001）でも若干分析したが、また、シタについての分析が主眼である本稿の論点からは逸れるが、ここであらためて確認しておこう。ここでもまた、田野村（1988）や三宅（1994）の枠を参照しつつまとめれば、次のようになる。「べ」の例もあわせて示す（以下、「べ」のイントネーションは様々であるので削除する）。

まず (a) 共通点としては、次のようなことがある。

(a-1) ベシタ・ドレともに、大枠としては知識確認の要求を表す（三宅の分類ではいずれもデハナイカI類）。

(51) あそこに栄屋っていう中華そば屋さんが見える {べ/ベシタ/ドレ}（潜在的共有知識の活性化）

(52) 七日町に八文字屋っていう本屋がある {べ/ベシタ/ドレ}（同）

(53) A：えー、お寿司なんか今食べたくないよ。

B：何言ってるんだ。お前が食べたいっていうから、買ってきたんだ {べ/ベシタ/ドレ}（認識の同一化要求）

(54) A：今夜は駅前にでも遊びに行こうかな

B：何言ってるの。おまえにそんな暇ない {ベ／ベシタ／ドレ} (同)

(55) おまえがそんなこと言うから、みんなに誤解を与えてしまったんだ {ベ／ベシタ／ドレ}。少し責任感じる (同)

(a-2) ベシタ・ドレともに、命題確認の要求、強い見込みをもった確認要求といった、「話し手の認識に不確定な要素が含まれている」ような場合（三宅の分類ではいずれもデハナイカⅡ類、3.2）には用いられない。

(56) おまえ、そこに行きたいんだ {ベ／*ベシタ/*ドレ}、本当は

(57) おまえも当然行く {ベ↑/*ベシタ/*ドレ}

(a-3) ベシタ・ドレともに、下降調をとるのがふつうである。

(a-4) ベシタ・ドレともに、丁寧のスや押しつけのズは共起しない。

(58) お宅が言い出したんだ {ベツス/*ベシタツス/*ドレツス}

(59) みんなで遠足に行ったケ {ベズ/*ベシタズ/*ドレズ}

以上のような点から、ベシタとドレは、話し手の知識は確定していて容易には動かないということをも共通点として持っていることが推測される。

一方、(b) 相違点としては、次のようなことがある。

(b-1) ドレは、知識確認の要求以外にも、次のような意味を表す。いずれの場合も聞き手の確認を要求するものではなく、「ベ」は使えなくなる。

(b-1-1) 驚きの表示：ある知識（情報）が一種の驚きを伴って新規に導入されたことを表す（三宅 1994：20）。

(60) よう、山田だ {*ベ/*ベシタ/ドレ}

(61) あれっ、雨が降っている {*ベ/*ベシタ/ドレ}

(62) なんだ、探していた本、ここにある {*ベ/*ベシタ/ドレ}

(63) (ゲームに熱中していて時間を忘れていた人が) あれっ、もう 10 時だ {*ベ/*ベシタ/ドレ}、もう寝なきゃ

(64) (風呂から歌う声が聞こえてきて) なんだ、お父さん、もう風呂に入っているんだ {*ベ/*ベシタ/ドレ}

(65) あれっ、ドアがしまらない {*ベ/*ベシタ/ドレ}

(66) A1：何か果物なかったっけ？

B：なかったんじゃない？

A2：(冷蔵庫を開けて) あっ、スイカがある {*ベ/*ベシタ/ドレ}

(b-1-2) 弱い確認の要求：「ね」で置き換え可能。

(67) そのスカート、きれいだ {*ベ/*ベシタ/ドレ}

(68) (写真を見て) 彼女、感じのいい人だ {*ベ/*ベシタ/ドレ}

(69) おまえもだんだん世の中がわかってきたみたいだ {*ベ/*ベシタ/ドレ}

(b-2) また、同じ知識確認の要求を表す場合でも、話し手の知識や認識のありかたという点において、ベ・ベシタとドレには根本的な違いがあるように思われる。結論を先に述べれば、次のようになる。

(70) ベシタ：聞き手の気づいていない話し手の想像・想定世界の事物や事態、あるいは、聞き手が（一度は）認識しているはずの、記憶のなかの想像・想定世界の事物や事態について、聞き手にその存在を想定させ、当該事物や事態に関する知識を共有することを促す。

(71) ドレ：聞き手の気づいていない現実世界の事物や事態、あるいは、聞き手が（一度は）認識しているはずの、記憶のなかの現実世界の事物や事態について、聞き手にその存在を指し示し（＝現場性、直接経験性、個別事態性が強い）、当該事物や事態に関する知識を共有することを促す。現実世界において生起する事態であるために、話し手は、聞き手の注意を喚起すれば、聞き手も五感や記憶を活性化して、その知識をすぐに共有しようと考えている。（渋谷 2001：24、(37)、(38)、一部修正）

ベシタはそのなかに「ベ」が含まれていることから予想されるように、話し手の想定が介在する確認要求形式である。それにたいしてドレは、ある現場において現実に生起している／存在している事態を指さして、聞き手にその事態生起・事態存在の確認を求めているようなイメージがある。話し手が直接経験したことによって得た証拠にもとづいた確認要求である。このことには、おそらく、ドレが指示詞起源の文末詞であろうことと関係があるかもしれない。

以上のようなベシタとドレの違いは、上の「(a) 共通点」のなかであげた例文では判別できないが、次のような例にある適格性の違いを見れば理解することができよう。

まず、ベシタが使えてドレが使えない例には、次のようなものがある。

(b-2-1) 一般則・仮定事態：蓮沼（1995）が「共通認識の喚起」「認識形成の要請」（三宅の「知識確認の要求」に当たる）としてあげる、次のような、（現実の事態ではなく）話し手の判断にもとづく一般則（非個別的事態）や話し手の仮定する事態などについては、基本的にベシタが使われ、ドレは使えない。

(72) 子供って、みんなカレーが好きだ {ベ/ベシタ/??ドレ}

cf. お宅の息子、カレーが好きだ {ベ/ベシタ/ドレ}

(73) 仮に 30 人来るとする {ベ/ベシタ/*ドレ}

cf. (30 人来ることが確定している状況で) 明日は 30 人来る {ベ/ベシタ/ドレ}

(74) (山形にいて) もしおまえがいま東京にいるとする {ベ/ベシタ/*ドレ}

(75) たとえば仙台にディズニーランドがあるとする {ベ/ベシタ/*ドレ}

(b-2-2) 話し手の想定による確認: 話し手が当該事態を自分の目などで確認しておらず、話し手の想定や思い込みによって知識確認の要求を行っている場合。

(76) A: 火曜日のお昼ごろ、スーパーで太郎君見かけたよ

B: えっ、なんで? 太郎君はたしかまだ高校生だ {ベ/ベシタ/*ドレ}

(77) もう許してやったらいい {ベ(ハー)/ベシタ/*ドレ}

(78) みんな行くんだから、私も行ってもいい {ベ/ベシタ/*ドレ}

(79) A: 何しに来たの?

B: おまえに会いに来たに決まってる {ベ/ベシタ/*ドレ}

(80) そんなこと、太郎に言ってもしょうがない {ベ/ベシタ/*ドレ}

次のような例では、話し手が自分の想定をもとにしてリモコンのありかを確認している B1 と B2 ではドレが使えないが、現場において聞き手にその事態を確認させるときには、逆にベシタが使いにくくなる (b-2-4 も参照)⁸⁾。

(81) A1: (2階でリモコンを探していて) リモコンってどこにやったっけ?

B1: (1階から返事をして) テレビの上にある {ベ/ベシタ/*ドレ}

A2: ないよ

B2: ある {ベー/ベシタ/*ドレ}。よく見てみなさい

A3: ないってば

B3: (2階に上がってきてリモコンを指さして) ここにある {??ベ/??ベシタ/ドレ} まったく

一方、ドレが使えてベシタが使えない例は、次のようなものである。

(b-2-3) 現場による証拠の入手: 話し手が、発話の場において、自分の目ではじめて確認して得た証拠にもとづいて確認要求を行う場合。ここには、想定といった心的操作が介入する余地はない。

(82) A: 金槌、どこに置いたっけ?

B: またどっかに置いたの? (柵の上にあるのを見つけて) ほら、ここにある {*ベ/*ベシタ/ドレ}

(83) A: 今度病院に行くの、いつだったっけ?

B: 覚えてないの? (カレンダーを見て) 今度の火曜日だ {*ベ / *ベシタ / ドレ}

(b-2-4) 現場における想定していた事態に関する証拠の入手: 関連して、事前に想定していた事態に関する証拠が、発話の現場で見出されたような場合には、ベシタは使用できない。

(84) (子どもがお菓子を食べ始めたのを見て) ほうら、やっぱり子どもはお菓子が好きだ {ベー / *ベシタ / ドレ}

(85) (テレビで台風情報を見ながら) おまえはこっちに来ないと言ってたけど、ほうら、おれが言ったようにやっぱり台風はこっちに来た {ベー / *ベシター / ドレ}

ベシタはあくまで、確信をともなった想定を有標的に表すので、上の例の場合のように、事前に想定していた事態が想定ではなくなり、現実として確認された場合には、使用できなくなる。ただし、この場合、「ベ」は使用可能である。発話時における証拠の入手という、いわば想定と事実のはざまにあって、両者が使えるようになるのかもしれない。なお、上の例の場合、ドレを使用すれば聞き手の誤った認識を非難するようなニュアンスが伴うのにたいして、「ベ」の場合にはそのようなニュアンスは必ずしもない。ちなみに、この、ドレの非難するようなニュアンスは、次のような、「ベ」、ベシタ、ドレの3つが使える場合にも同じようにある。

(86) おれ、おまえにあれほど念を押したケ {ベ / ベシタ / ドレ}

3.6. まとめ

以上、本節では、ベシタの用法について検討した結果、以下のようなことを明らかにした。

(x) ベシタは、「ベ」やドレとともに、「知識確認の要求」を表す。

(y) その確認要求のありかたは、次のような特徴をもつ。

(y-1) 話し手は、聞き手に確認を要求しようとしている内容について、すでにかんがりの確信を得ている (ドレと共通し、「ベ」と相違する点)。

(y-2) 話し手が聞き手に確認を要求しようとしている知識や情報は、話し手が想定したものであり、現実世界のものではない («ベ」と共通し、ドレと相違する点)。

4. ガシタ

続いて本節では、ガシタについて分析する。まずガシタの基本的な意味・用法を記述し (4.1)、よく観察される語用論的な用法を確認したあと (4.2)、類似する意味・用法をも

つガと比較して、ガシタの意味と用法をより明らかにすることを試みる(4.3)。

4.1. ガシタの基本的意味

ガシタは常に下降調を伴い(正確には、ガシが低く発音されるか、ガの部分が高くシで一度下がったあと、タの拍内で高い位置から下降する。タは長音になることが多い)、基本的に話し手が納得したことを表す(ただし、ガシタとガの意味には違いがあり、ガシタには話し手の発話時以前の確信や想定がある。4.3参照)。名詞の場合にはダを介して、用言にはその終止形に下接する。

(87) A: お父さん、なんでそのお菓子食べたの?

B: なんだ、おまえが食べるんだケガシター

(88) A: なんでこんなに早くでかけるの? まだ9時だよ

B: (時計を見て) えっ、あれっ、まだ9時だガシター。向かいにいつものトラックが来たからもう9時半ごろかと思った

(89) (旅行者が写真で見た磐梯山を列車の窓から探していて) あっ、さっきから見えているあの山、あれが磐梯山だガシター。写真の通りに見えてきてやっとわかったよ

(90) (クリスマスパーティにでかけようとするときに、友達も外出の用意をしているのを見て) あれっ、おまえも行くんだガシター。俺だけかと思ってた

(91) (友達が鞆から風邪薬を出して飲んでるところを見て) おまえ、風邪ひいてるんだガシター。どうりでさっきからグスグスいっていると思った

そもそも納得という発話行為が起こるためには、次のようなことが行為の条件となる。

- (a) 話し手が、外部から新たな情報を与えられること。その情報は、会話の相手から直接ことばによって与えられるものでも、状況から導き出した自身の推論によるものでもよい
- (b) ①その情報はそれまで話し手がもっていた情報と異なっていること、もしくは、②それまで話し手がもっていた情報が不確かであること
- (c) 話し手が、①それまで自分もっていた情報を破棄して新たに与えられた情報を採用すること、もしくは、②新たに与えられた情報によってそれまで自分もっていた不確かな情報を補てんすること

例えば(87)の例では、Bは、Aの詰問によって、そのお菓子はAが食べる予定だったという情報を推論によってはじめて入手する(a)。その情報は、そのお菓子は誰も食べないだろうというBの予想とは異なったものであり(b①)、そこでようやくAが食べる予定

だったという事態を確認し、承認したものである (c ①)。

(c) については、納得という意味を表すためには、新規に導入された情報は確定していなければならない。したがって、

(92) *あの人山田先生 {ダベ／ガモスンネ (かもしれない) /ミデダ (みたいだ)}
ガシター

のような、話し手自身の推量や蓋然性判断等を含む文は非文になる⁹⁾。

なお、同じ納得ということばでまとめられるような場合でも、次のようなときにはガシターは使用できない。

(93) A1: 昨日学校に来なかったけど、どうしたの？

B: 実家に帰っていたんだ

A2: どうりで電話にも出ない {*ガシター／ハズダ／ワゲダ}

ガシターがスコープとするのは新たに導入された新規情報のほうであり、その新規情報から話し手が論理的に導き出した帰結ではない。したがって、上の文も、A2の発話を次のように変更すればガシターが使えるようになる。

(94) A1: 昨日学校に来なかったけど、どうしたの？

B: 実家に帰っていたんだ

A2: あー、実家に帰っていたんだ {ガシター／*ハズダ／*ワゲダ}。どうりで電話にも出ないはずだ

4.2. ガシターの語用論的用法：行為要求

ガシターには、聞き手の行為を語用論的に丁寧に要求する用法があって、よく活用される。

以下の例では、話し手の納得ということを表していることには違いがないが、その納得のありかたはストラテジックである。

(95) (相手が帰る用意をしているのを見ながら) ちょっと頼みたいことがあったんだけど、もう帰るガシター

(96) 実は君に手伝ってほしいことがあったんだけど、忙しいガシター

(97) 本当は君に僕とつきあってほしいと思っているんだけど、やっぱり僕なんかじゃだめだガシター

いずれもケド節によって話し手が聞き手に希望する行動内容を表し、主節でその希望の成就を話し手自身がうち消すかたちになっているが、話し手はあきらめているわけではない。これらの例文では、「帰る・忙しい・僕ではだめだ」といった話し手の希望がかなえられない要因を話し手自身が意図的に (相手の状況や心情を理解しているようなふりをし

て) 導入し、そのことに納得するようなそぶりを見せながら、そのような要因が本当にあるかどうかを、できればないことを祈りつつ、聞き手にうかがっているのである。

文字どおりの意味としては、依頼の内容を明言しつつも、それはかなえられないことだと知っている(表面上は)述べているもので、聞き手が断りやすい状況を作り出しているために丁寧な依頼になる。ネガティブポライトネス・ストラテジーのひとつである。

4.3. ガシタとガ

山形市方言では、ガシタのほかに、共通語の「か」に対応するガ(イントネーションは下降調をとる)も、納得を表す形式として使用される¹⁰⁾。本節では、ガシタとガの用法をくらべつつ、ガシタの意味をより明確にすることを試みる。

結論から述べれば、ガとガシタの違いについては次のようにまとめることができると思われる。

(98) ガ : 会話の相手や状況から新規に情報を獲得し、その情報を受容して納得することを表す。汎用的な無標形式である。

ガシタ : 会話の相手や状況から獲得した情報は、納得せざるをえないものではあるが、それまで話し手のもっていた知識や確信度の高い認識と、新たな情報とのあいだにギャップがあり、納得にいたるまでには推論や記憶の検索、新規情報の反芻などの心的操作がある／あったことを積極的に表す。用法が限定された、有標の形式である(4.1(b①)、(c①))。

ガの用法がガシタの用法をそのなかに含み込むという関係である。これまであげてきたガシタの例は、前接形式の活用等の必要な変更を加えたうえで、すべてガに置き換えることができるが、次のような例ではガしか使用することができない。

(99) (カーナビを見ながら行き方を探していて) あっ、わかった、ここを右に曲がればいいの {ガ / *ダガシタ}

(100) A : おい、知っている? あいつ、彼女に告白したらしいぞ

B : へー、あいつもとうとう告白した {ガ / *ガシタ}。やったね

(101) A : 右側に見えるあの山は蔵王という山だよ

B : あっ、あれがあの有名な蔵王 {ガ / *ダガシタ}。

(102) A1 : 小林先生のところに行ったら今度いつ大学にいらっしゃるか、聞いてきてくれる?

B1 : いいよ

A2 : (報告して) 来週の火曜日だって

B2: そう {ガ/*ダガシタ}、わかった。ありがとう

これらの例に共通する点は、「話し手に新規情報によって書き換えられる発話時以前の知識や想定がなく、会話の相手やまわりの状況から新規に情報を獲得し、その情報をすなおに受容して納得するという行為を完了する」といった点にあると思われる。このような、新規情報をすなおに受容するといった場合には、ガシタは使用できない。関連して、ガは、

(103) しょうがない、おまえのためにここはかわりに行ってやる {ガ/*ガシタ}

(104) しょうがない、俺からあいつに本当のことを言う {ガ/*ガシタ}

のような、話し手を取り巻く状況に納得して行為をその場で申し出る（独り言の場合には決意する）ような場合にも用いられるが、これも、「状況から導き出される話し手のとるべき行為のありかたを受容する、そして受容したあとはその申し出を変更しない」といった点で共通している。

一方、次のような場合には、ガシタのほうが語用論的に適切性が高いように思われる（以下の例文では、「?」は語用論的適切性が劣ることを表す。文法的なものではない）。

(105) A1: 君が見たっていう人は、きっと彼女じゃないよ

B1: そうかなー

A2: そうだって。だって彼女はきのう一日中家にいたんだもの

B2: ンダ {? ガー/ガシター} (=そうかー) やっぱり彼女じゃない {? ガー/ガシター}

(106) A1: おい、知ってる? あいつ、彼女に告白したらしいぞ

B1: えー、あいつ、彼女が好きだったの?

A2: なんだ、知らなかったの?

B2: うん、知らなかった。ンダ {? ガー/ガシター} そういえばそんなそぶりもあったなー

(107) A1: あの人、千歳山でまむしを捕まえたんだって

B1: えー? 千歳山にまむしはいないだろう

A2: だってまむしが好きそうな竹林がいっぱいあるじゃない

B2: あーそう {ガ/*ダガシター}。やっぱりいる {? ガー/ガシター}

いずれも聞き手によって新規の情報が与えられてから話し手がそれを受け入れるまでに時間的な隔たりがあるもので、(99) ~ (102) で見たガの例のような、「その情報をそのまますなおに受容して納得という行為を完了する」といったものではない。例のなかには、一応納得はしたものの、まだその情報の妥当性を検討しているようなものもある。こういった点からガシタは、

- (a) 話し手がすでにもっていた知識や認識と新たに獲得したそれとのあいだにはギャップがあり、話し手が新規の情報を受け入れるまでには、その妥当性を確認するために推論や過去の記憶の検索などの心的操作が必要になる
- (b) 納得という行為はまだ完了せず、ガシタを使用した文が発話されたあともなお、その推論や検索、反芻などが継続する

といった場合に特徴的に用いられるように思われる。この違いは、(107) の B2 の例に顕著に現れている。この例ではガとガシタの適格性／適切性が2つの文で逆になっているが、これは、話し手が、「千歳山に竹林が多いこと」はそのまま承認できるが、「千歳山にまむしがいること」はすぐには納得できなかった（発話時にはまだその妥当性を検討している）ためである。ただし、(b) の条件はガシタの意味の本質的などころではないようで、

- (108) A1 : みんなの迷惑になるかもしれないし、やっぱりパーティ行くのやめどころか
B : でも、ある程度の人数は必要だろう？

A2 : そうするとやっぱり行ったほうがいい {ガ／ガシタ} よし、じゃすぐ出かけよう

のように、即座に納得されてもよい。

なお、ガは、ガシタと同じように、

- (109) A1 : (部屋の外から) 今何時？

B : (部屋のなかで) 5時だよ

A2 : こんなに暗いの？ (部屋に入って時計を見て) まだ5時 {ガ↓／ダガシタ}

- (110) A1 (母親) : 早く起きなさい

B (子ども) : 今日は学校休みだよ。カレンダー見てみな

A2 : あっ、今日は日曜日 {ガ／ダガシタ}

のように、話し手のすでにもっている知識（思い込み）と新たな情報のあいだにギャップがある場合や、

- (111) A1 : (部屋の外から) 今何時？

B : (部屋のなかで) 5時だよ

A2 : こんなに暗いの？ (部屋に入って時計を見て) 5時 {ガ↓／ダガシタ}
でもおかしいなー、こんなに暗いの

のように、情報の妥当性をまだ疑っているような場合にも用いることができる。ガを無標の納得形式としたのは、ガのこういった特徴を根拠としてのことである。

5. まとめ：シタの特徴

以上、本稿では、「べ」とベシタ、ガとガシタを対比的に分析することによって、これら4形式の意味と用法を整理することを試みた。ここで、この4形式の意味・用法を再掲すれば、次のようになる。

(112) ベ : 知識確認の要求を表す無標形式である。話し手の知識や認識をそのまま聞き手にもちかけて、聞き手の確認を得ようとする場合に用いられる。話し手の知識や認識がどの程度確定しているかということとは関与しない。どのような場合でも使用できる。

ベシタ : 話し手の知識や認識は確定しており、その確定した知識や認識にもとづいて、聞き手にその確認を要求する。したがって、確認要求にたいする聞き手の返答が話し手の確認しようとした命題内容を肯定するものではない場合でも、話し手の知識や認識は容易に変更することはない。有標の形式である。

(113) ガ : 会話の相手や状況から新規に情報を獲得し、その情報を受容して納得することを表す。無標形式である。

ガシタ : 会話の相手や状況から獲得した情報は、納得せざるをえないものはあるが、それまで話し手のもっていた知識と新たな情報のあいだにはギャップがあり、納得にいたるまでには推論や記憶の検索、新規情報の反芻などの心的操作がある／あったことを積極的に表す。用法が限定された、有標の形式である。

最後に、「べ」とガにシタが付加することによってもたらされた意味・用法の変更点を確認することによって、シタのもつ意味を抽出してみよう。複合形式の意味が、それを構成する下位単位の意味の単純な累加によって構成されるとは限らないが、ベシタとガシタの用法からシタの意味を特定するのに関与的などころを抜き出せば、次のようになる。

(114) ベシタ : 聞き手にたいして確認要求を行う場合の話し手の知識や認識は、話し手が確信をもっているものである。

(115) ガシタ : 話し手が外部から新たに入手した情報を受け取るには受け取るが、話し手の既存の知識や認識が単純な受容を妨げている。

ここに共通するのは、

(116) シタの機能 : ①話し手には発話時以前に確信や想定があり、②その状況のもとで、知識や認識を書き換えることを要求する

ということで、(a) この機能が聞き手に向かうときには、確信をもって聞き手に知識や認識を書き換えることを要求する確認要求となり（ベシタ）、(b) 話し手に向けられるときには、話し手に既存の知識や認識を書き換えることを要求する表現となる（ガシタ）。話し手の、情報管理のありかたを示すモダリティ形式である。(a) がシタの二人称についての機能、(b) が一人称についての機能であるが、三人称については、会話の場において「知識や認識を書き換えること」を第三者に要求するという行為がそもそも成り立たない。シタが「べ」とガとしか共起しないのも、そこに理由があろう。ちなみにドレは、シタのもつ(116)のような機能を、それ自身の機能としてすでに含み込んでいる。

なお、ベシタはつねに聞き手を目当てとして使用されるが、ガシタについては、[話し手の発話時以前の確信と新規情報が衝突し、話し手にその確信の書き換えを求める行為]は、話し手自身の内部で生じることであるために、独り言でも使用できる。したがって、シタは、必ずしも聞き手を目当てとするモダリティ形式ではない。

以上をまとめれば、シタは、「べ」やガなどの形式が担う、知識や認識の確認（確認要求）や受容（納得）といった広範な意味のなかから、とくに「話し手に発話時以前に既存の知識や認識、想定がある」場合を取り出して、その書き換えを聞き手（確認要求）や話し手（納得）に求めることを積極的にマークする形式だと言える。

以上、本稿では、「べ」とベシタ（3節）、ガとガシタ（4節）の用法を対比的に分析することによって、文末詞シタの機能を抽出した（5節）。

【注】

- 1) 本稿は、以下のプロセスを経て成ったものである：澤村がベシタとドレについて、大久保がガシタについて最初の分析を行う→渋谷が集約して全体をまとめ、最初の全体原稿を作成する→澤村・大久保・松丸が加筆・修正する→渋谷が再集約する→澤村・大久保・松丸がコメントを加える→渋谷が最終原稿を作成する。
- 2) シタは、他の文末詞と同様に無活用であり、意味も異なるために、動詞スルのタ形とは解釈できない。
 - どうやら自分のミスに気づいたかして、その後は何も言っていないのか+シテなどとは違った形式であると思われる。
- 3) 本節はベシタについて分析が不足していた渋谷（2001）の補遺でもある。
- 4) ただし、この例のように申し出を表す場合以外には、当該方言では「べ」は使いにくい。「あしたは何を食べようかな」のような場合には、クウベガナではなく、動詞のル形を使ったクウガナのほうが一般的である。
- 5) 「(はじめてその店のラーメンを食べて) へー、なかなかうまいじゃない」というのとは別。この場合

当該方言では、べ・ベシタいずれも使用せず、ドレを用いる

- 6) 大阪方言の一種の確認要求表現であるガナも、聞き手が知らない情報について伝達するとき用いられることがあり、これらの例はすべてガナで置き換えることができるが、次のようなガナの例は、ベシタでは置き換えられない。ガナとベシタの用法には違いがある。

○ 阪神、また負けた {ガナ/*ベシタ}

- 7) 確認要求とは、話し手の知識や認識のほうに妥当性があるということを聞き手に伝達するものであるから、その行為自体がもともと丁寧なものではない。共通語で確認要求に「だろう」が使いにくく「でしょ(う)」のほうが用いられやすいといったことも(中北 2000)、そこに理由がある。ベシタの場合は、丁寧語のスをつけても丁寧にならないということであろう。本文中では文法的に不適格とした。
- 8) (b-2-1) 一般則・仮定事態と (b-2-2) 話し手の想定による確認については、本文では渋谷の内省にもとづいて記述を行ったが、ドレの使用をめぐる、渋谷と澤村・大久保のあいだで適格性判断にずれがあった。渋谷はいずれもドレを用いた文を非文とするが、澤村・大久保は適格とする。次の例も同様。

○ A: それ、どんな味がするの? ちょっと食べさせてみてよ、ねえ

B: そんなに食べたいんだったら、自分で注文して食べてみたらいい {べ/ベシタ/*ドレ}

○ A: 遅いよー、もっと早く歩けないの?

B: 無理だよ。そんなに急ぎたかったら勝手に先に行ったらいい {べ/ベシタ/*ドレ}

上の文は、話し手が、聞き手のふるまいに怒って、聞き手のとるべき行為を聞き手に投げつける(最終通告を与えるような響きのある)タイプのもので、いずれも話し手の想定事態の確認要求であるためにベシタが使われるはずのところであるが、澤村・大久保にとっては、ドレは、「聞き手に認識を共有してもらわないと事態が收拾しないため、話し手の行為要求があたかも現実世界に根拠をもつかのように見せかけて、話し手が聞き手に認識を強制する」といった拡張した用法で使うことができるものと思われる。語用論的な、ストラテジックな(想定世界を現実世界のものとみなすメタファー的な)拡張使用である。同様に、

○ (いたずらで叩いてきた子どもに対して) そんなことしたら、痛い {べ/ベシタ/*ドレ}

のような、現実生起している事態についても、渋谷はドレを非文とし、澤村・大久保は適格とする。渋谷の場合は、「痛い」といった話し手の内部感覚は、会話のなかで話し手と聞き手が共有できる現実として把握することはそもそも不可能であると判断しているのかもしれない。

以上をまとめると、渋谷はベシタとドレを「現実世界」か「想定世界」かでいけば文法的に使われているが、澤村・大久保は、それが「想定世界」の場合でも、「話し手が聞き手の認識を強制的に要求する」=「想定世界の中に現実世界をメタファー的に読み込む」場合にもドレが使用可能で、ドレが語用論的に拡張する傾向が強い。この理由には、次のようなことが考えられる。

・渋谷が山形市方言を日常的に使用していないために、(日常的に使用している話者に顕著な)語用

論的な拡張を控える傾向がある。

- ・ 渋谷が当該方言を習得した時期と澤村・大久保が習得した時期に 20 年以上の開きがあるが、この間に、山形市方言でドレが意味変化を起こしていて、もとのベシタの意味領域を侵しつつある。
- ・ 澤村・大久保には、想定世界と現実世界を区別しない共通語の「じゃないか」などの影響がある。いずれが妥当な理由かは、現時点では不明である。

9) ただし、相手の発話をメタ的に引用するような場合には適格度があがる。

- A: その箱、そんな作り方をすると壊れるかもしれないよ
- B: ? あー、そうかー、やっぱり壊れるかもしれないガシター

10) ガはそのほかに、共通語の「か」と同じく Yes-No 疑問や反語、「べ」と共起して) 疑念表示などを表す。

- その本屋で文房具も売ってるガ↑
- そんなばかなことあるカヨ↓
- 太郎は本当に来るベガ↓

【参考文献】

- 安達太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版。
- 渋谷勝己 (1999) 「文末詞『ケ』—三つの体系における対照研究—」『近代語研究』第十集 武蔵野書院。
- (2000) 「山形市方言の文末詞ズ」『阪大社会言語学研究ノート』2。
- (2001) 「山形市方言における確認要求表現とその周辺」『阪大社会言語学研究ノート』3。
- 田野村忠温 (1988) 「否定疑問文小考」『国語学』152。
- 中北美千子 (2000) 「談話におけるダロウ・デショウの選択基準」『日本語教育』107。
- 蓮沼昭子 (1995) 「対話における確認行為—『だろウ』『じゃないか』『よね』の確認用法—」仁田義雄編『複文の研究 (下)』くろしお出版。
- 三宅知宏 (1994) 「否定疑問文による確認要求的表現について」『現代日本語研究』1 大阪大学文学部日本語学科現代日本語学講座。

渋谷 (文学研究科助教授)

澤村 (東北大学大学院文学研究科博士課程前期)

大久保 (東北大学大学院文学研究科博士課程前期)

松丸 (文学研究科助手)